整理番号　５

新しい公共支援事業の成果等報告
（新しい公共の場づくりのためのモデル事業分）

１　事業実施内容

モデル事業名	外国籍児童生徒放課後学習支援事業	
分類	☑一般枠　　□ＮＰＯ支援重点化枠	
事業実施主体名	特定非営利活動法人　愛伝舎	
事業概要	外国籍小中学生に週２～３回の学習支援を行い、子どもの学習を学力、国語（日本語）能力の２面から支えていく。 子どもの教育に家庭が果たす役割も大きく、保護者へも学校生活とキャリア形成に必要な環境の作り方や生活指導の意義を伝えていく。 そして、教育の情報を支援者と保護者が共有し、子どもに対する教育的支援の一貫性を保つように図る。とくに生活指導に関しては、社会の規律や道徳観を反映しているので、指導の意義を理解できるような支援をする。 この支援活動を発信して、ステークホルダーの開拓を心掛ける。	
実施期間	平成 23 年度	平成 23 年 9 月 26 日から平成 24 年 3 月 31 日まで
	平成 24 年度	平成 24 年 4 月 1 日から平成 25 年 3 月 29 日まで
支援額 （注釈参照）	平成 23 年度	３，００３，０００円　※総額のみ記載してください。
	平成 24 年度	※総額及びその内訳を記載してください。 ５，９５９，６２３円 【内訳】 人件費　４，３０５，６１０円 謝金　１０５，７５０円 アドバイザー料　２４０，０００円 旅費　２１２，４２０円 通信費　７０，３６０円 会場費　６４０，９６１円 書籍・教材費　１１６，５６３円 その他　５６９，１６６円
マルチステークホルダー（会議体）の取組状況	●協働事業参加組織	
	県ＮＰＯ室、多文化共生課、研究者（三重大学教育学部）、地域(学習支援者、寄付金支援者)、企業（ミエブラスプロジェクト）	
	●会議の実施状況	
	実施月日	会議の議題
	４月２６日	【支援会議】学習者の課題克服に向けた支援方法の確認
	５月１４日	【支援会議】学習者の課題克服に向けた支援方法の確認
	７月５日	【支援会議】夏休み支援の方向性確認
	７月２６日	【運営委員会】個別学習支援の成果と課題、事業方向性の確認
	８月３１日	【支援会議】学習者の課題克服に向けた支援方法の確認
	１０月２３日	【支援会議】学習者の課題克服に向けた支援方法の確認
	１２月５日	【支援会議】学習者の課題克服に向けた支援方法の確認
	１２月２０日	【運営委員会】支援成果と課題、外国につながる子どもたちの

		課題、事業展開について
	１月１０日	【支援会議】学習者の課題克服に向けた支援方法の確認
	２月２１日	【支援会議】学習者の課題克服に向けた支援方法の確認 【保護者会】教室と家庭の連携、新年度事業について
	３月１８日	【運営委員会】平成 24 年度のまとめ報告、25 年度見通し

事業内容

●事業内容

ａ）外国籍小中学生への学習支援

小学生：週二回（国語・算数）　午後５時～６時
中学生：週三回（英語･数学二回、国語一回）午後６時～７時３０分
長期休暇時の支援：週三回　午前実施

▸毎日の生活のリズムを崩さないように、長期休暇には時間帯を変えて実施している。

ｂ）生活指導

あいさつ、出欠連絡の徹底、話し方指導、受験生の面接指導

▸社会から求められる態度や話術、礼儀を身につけて、TPO にあわせられるようにする。

ｃ）セミナー等への案内、引率

１０月１３日　津市進学ガイダンスに教室卒業生（高校生）を講師として派遣
３月２４日　県立図書館仕事講座「パティシエという仕事」に中学生２名引率
参照：http://www.pref.mie.lg.jp/TOPICS/201302009520.pdf
３月２８日　夢の懸け橋奨学金第一回授与式に子ども８名保護者３名参加

▸社会への関心や視野を広げるため、子どもたちや保護者に対して行事やセミナーの案内をしている。知的な刺激を学習に還元して、キャリアへの意識を明確化・確実化するように参加を促している。

ｄ）保護者へのアプローチ

・通信発行
　教室の様子、学習支援に関する情報、日本の学校で大切にしていることの紹介など
・メール連絡
　月謝袋配布と月謝受領連絡、出欠確認など
・電話確認
　子どもに関する情報交換、月謝未納の問い合わせ、出欠確認など
・二者面談（コーディネーターと保護者）
　子どもの様子についての情報交換、相談など
・保護者面談（支援者と保護者）
　教育に関する保護者の考え、学習に関しての保護者の不安など聞き取りと確認、学習に関する情報交換や相談など
・保護者会
　保護者と支援者、コーディネーター、通訳等関係者の交流

▸これらを通して、すべての関係者が協力して子どもの教育を進める体制になっている。

	ｅ）支援会議 ほぼ毎月の開催。 ▸生徒ひとりひとりの成果と課題を共有し、今後の支援に活かすもの。ふだんの支援者のつぶやきなどからわかる、悩みや困りごとなどもここで解決するようにしている。 **ｆ）運営委員会** 学期ごとの開催。 ▸ステークホルダーによる会議。支援と運営について検討するもの。 **ｇ）教育相談業務** 随時。 ▸教室運営から派生して行うようになった業務。教育拠点として認められて、いろいろな人が相談に訪れたり電話してきたりするようになった。 ◆参考URL　http://aidensha.jimdo.com/
当初計画（採択時）からの変更点とその理由	平成２４年４月、集団支援の中止。母集団となる津市のブラジル人学校の閉校によるもの。 国際教室への取り出し授業の効率化、教師負担の軽減などの可能性を探る試みだったが、異学年集団による集団授業の場を失った。この集団は公立小学校に通うブラジル籍児童の母語維持のための学童保育集団だったため、これに代わる場を他に求めることができなかった。
成果と課題	●成果 一年半の取り組みを通じて、外国人児童生徒向けの新しい学習支援のモデルを構築することができた。（鈴鹿モデル：ブロチーニョ） その特徴は次のとおり。 **１．外国人児童生徒のニーズを踏まえた新しい教育の場** 外国につながる子どもたちへの日常の学習支援には、学校教育のなかで行われるもの、地域のボランティア教室、学習塾などがある。 ボランティア教室は限られた予算で運営され、支援者の休日や余暇に支援を頼るため、支援日が限定されていることが多い。無料であることが多く、子どもたちの定着や学習意識のムラにつながることもある。 学習塾は年間を見通した支援が可能であるものの、外国につながる子どもたちの課題に対しての支援を、多数の日本人生徒のなかで行うことは難しい。月謝だけでなく、年度初めに資料代や光熱費などの支出が必要である。 小さな芽（ブロチーニョ）教室に入塾した子どもたちのなかにも、公文や学習塾に通っていた子どもたち、ボランティア教室から替わって来た子どもがいる。塾を替えた理由について、保護者は教室の子どもたちの学習への本気度、経済的負担の大きさ、支援者のスキルをあげている。営利目的ではなく、保護者が支えることができない家庭学習を補い、日本人同様のキャリアを子どもにつけたいと願う保護者の選択肢となった。

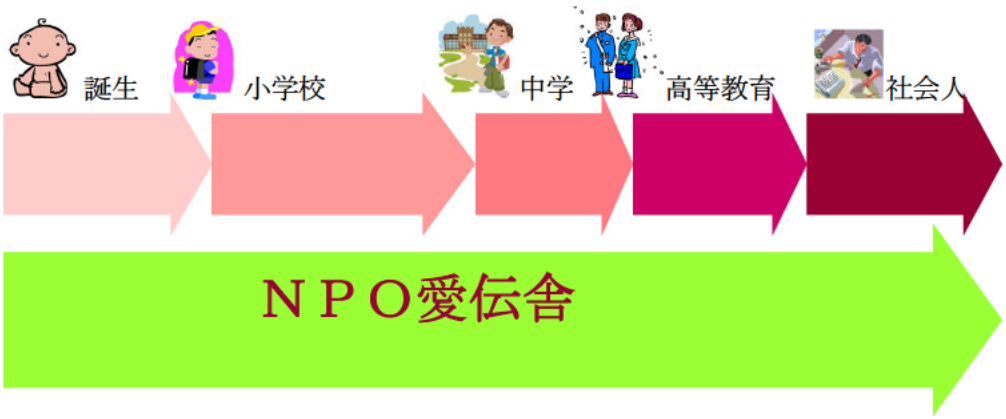
２．母語と日本語を話すことができる

子どもたちは、学校生活では日本語を、家庭では母語を、と使い分けて暮らしている。一方で、学校では母語を使うことを気兼ねし、家庭では日本語で学んでいる学校の勉強を保護者に手助けしてもらえない寂しさも味わっている。常に言語のストレスがある環境のなかで生活をしている。母語と日本語の双方を保障する空間・時間がブロチーニョであり、同じ境遇の仲間がいる「居場所」を作っている。

子ども同士が母語でも学びあえることは、母語の維持向上や学習理解が進む側面もある。保護者にとっても大きな安心材料となった。

３．子どもたちの成長を見通せる支援が可能

子どもたちへの支援は、学校は１年間単位、あるいは修業年限という期間に限定される。ここに、課題を解決するまで長期的な支援を継続できる機関がはいることで、子どもたちひとりひとりの成長のカルテができる。学力だけでなく、成育歴や家庭環境など、子どもに関する総合的な情報が集まり、キャリアの形成に活かしやすい。



また、支援者、コーディネーター、通訳はともに子育てを経験した「おかあさん」であるため、保護者に対して子どもの年齢に応じた家庭での教育の仕方を的確にアドバイスできる。日本と母国の違いを支援側が会議などを通して共通理解して、きめ細かく支援することができる。

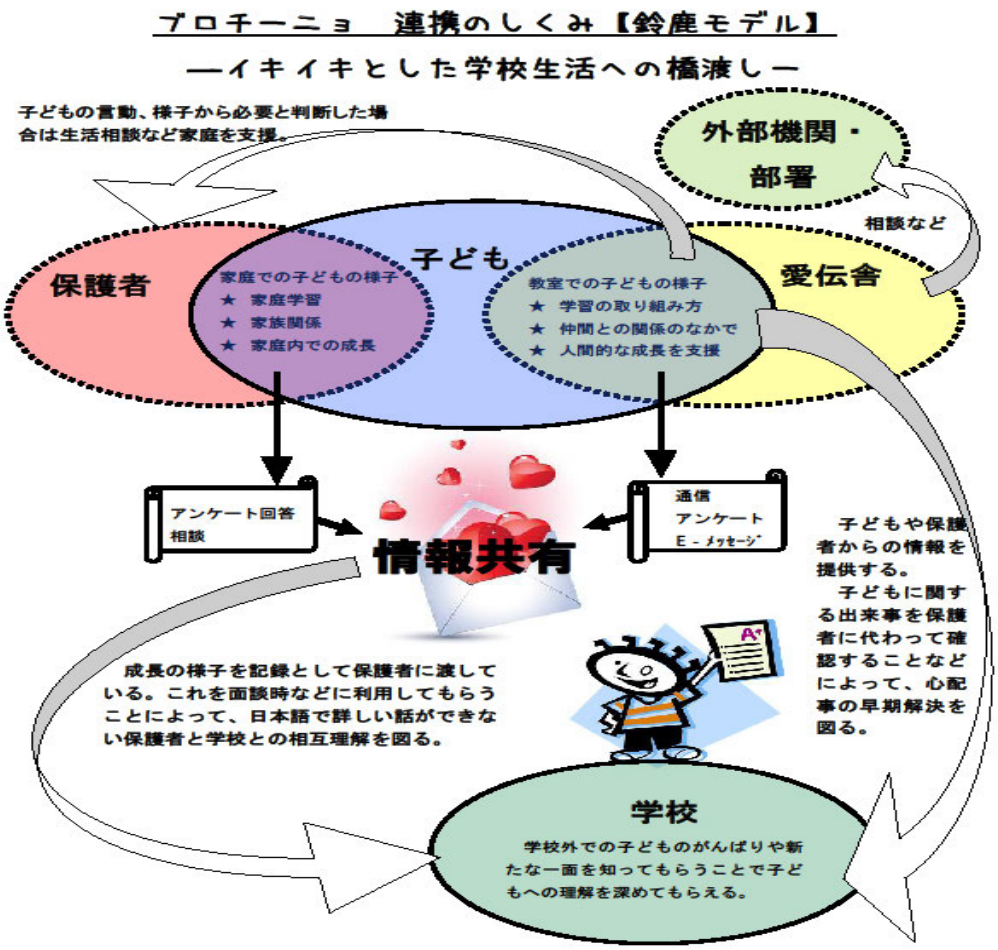
４．外国人家庭の地域社会参加を促す

外国人が日本で生活するのに、仕事では通訳がおり、生活では外国人コミュニティをのなかで暮らすことが多く、地域社会との接点は少ない。ところが、子どもの学校教育を通して日本語が必要になり、地域社会とのつながりが生まれる状況になってくる。

子どもたちの交友関係、活動範囲が広がって行くにしたがって、保護者は自分が知らない出来事や文化、習慣などに出会うようになる。そうしたときに、ブロチーニョの支援者やコーディネーターは相談できる相手となり、保護者と地域との相互理解を図る緩衝材としての役割も果たすことができる。

たとえば、子どもが学校の友達とけんかをしてけがをしてしまったときに、相手が日本人の子どもだと、双方の言い分を外国人の保護者が公平に聞きとることは難しいことである。きちんと前後の状況を把握できなければ、子どもを友達と遊ばせ

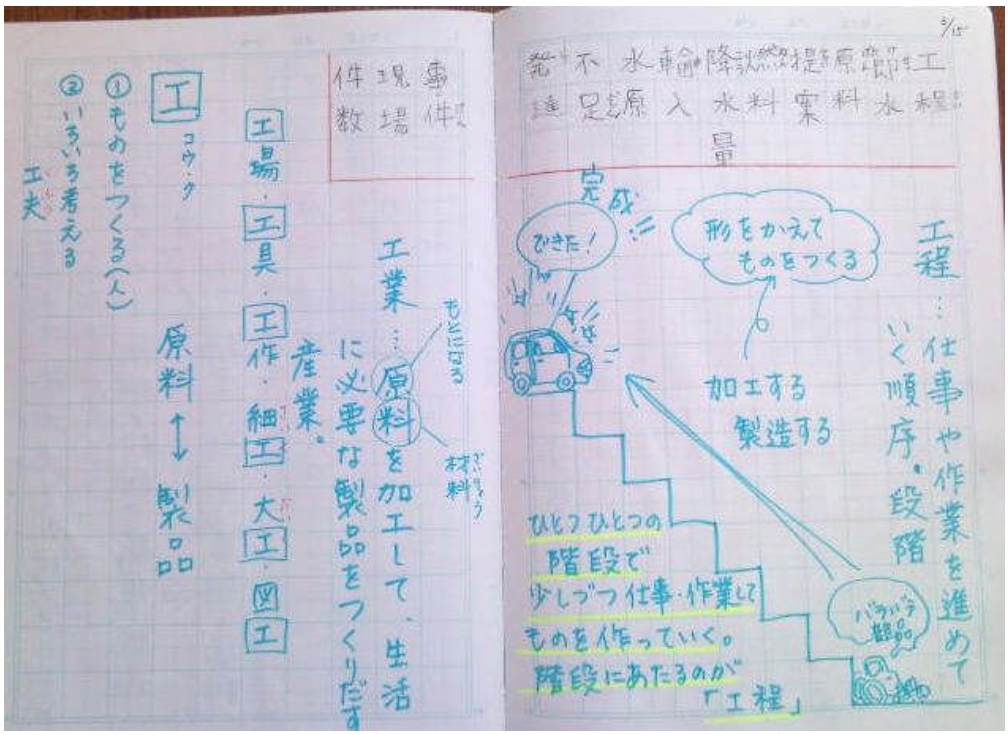
ることすら不安におもうようになるだろう。このような不安を気軽に相談できることは、地域社会のなかで日常生活を安心して暮らしていくのに重要なことである。
　これを模式図にしたものが以下の「鈴鹿モデル」である。



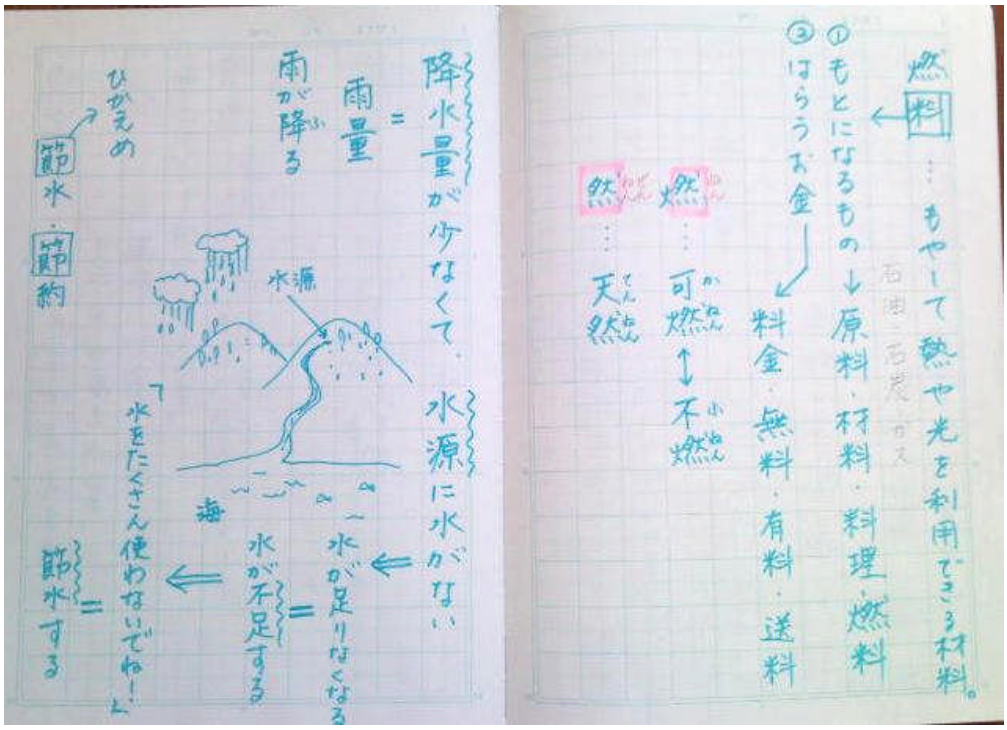
【学習支援カリキュラムの特徴】

１．ことばノート、九九表

　この事業を通して、漢字の読み書き、本読みができている子どもであっても、ことばの意味を理解していないことが判明した。学校（特に小学校）では、学習面で特に問題がないと思われている、あるいは、取り出し授業を受けていない外国につながる子どもたちの多くもこれに該当する。「話す・聞く」ことに問題がなくても、「読む・書く」力が低いことが多く、これが中学校での低学力につながっていく。
　そこで、支援の際には目、耳、口、手など複数の感覚を使って覚えやすくし、関連することばや似た表現などもいっしょに、それを一冊のノートにまとめて「ことばノート」をつくった。個々の子どものことば（日本語）の課題が教科を横断して一冊になることは、子どもにとっての辞書になるとともに、目に見える学習量でもある。このノートを、家庭で保護者といっしょに見て学習したことを話題にする、という宿題にしている。



①学校でわからなかったことばを、まず子どもが書きだす。この日は社会の教科書から選んだ。
（小学校４年生のことばノート）



②子どもがことばをイメージできるような工夫を「仕掛け」ながら、子どもと一緒にノートをつくっていく。時間が足りないときにはノートを預って、次の学習までに完成させておく。

２．九九表

家庭学習で子どもが覚えようとする九九も、保護者にとっては何を言っているのかわからない呪文のようなものである。これを保護者と子どもがいっしょに学べるようルビをふった九九表をつくった。

sabu rocu jyuuhachi	shi rocu nijyuushi	go rocu sanjyuu
3×6=18	4×6=24	5×6=30
san shiti nijyuuiti	shi shiti nijyuuhati	go shiti sannjyuugo
3×7=21	4×7=28	5×7=35
san pa nijyuushi	shi hachi sannjyuuni	go ha shijyuu
3×8=24	4×8=32	5×8=40

ブラジル人向けに日本語風に読めるアルファベット遣いのローマ字でルビをふっている。

外国につながる子どもたちの家庭学習には、その学習に加わることができる工夫をすれば、保護者が教育に参加しやすくなる。

【その他、取り組みを通じての成果】

１．地域人材の安定的、継続的な社会参加

支援者の継続的な参加を維持するためには、事業の運営理念を理解してもらうとともに、支援者の思いや性格を当方が理解して調整することも必要となる。教室では支援者のモチベーションをケアする体制を整備して、支援者が経験やスキルに差や限界を感じて自分に自信を失うことがないように配慮し、支援者の家庭の理解を得られるようにした。

【体制】　・コーディネーターと支援者の分離
　　・支援者会議

２．社会ニーズをとらえる情報集積が可能

複合的な課題を抱え、文化やことばの壁によって社会的サービスにアクセスしにくい人々は、経済的困窮や社会的孤立状態になりやすい。ブロチーニョは子どもの教育を中心にして家庭とも深く関わるしくみ、取り組みになっているため、外国人家庭の様々な状況や問題が明らかになりやすく、情報が集積しやすい。このことは、すなわち、社会ニーズをとらえやすく、問題を未然に防ぐ手立てをとれるということであり、セーフティネットの強化にもつながる。

人口減少で社会が縮小していくなか、日本に定住しようと考えている外国人の潜在的な存在価値は高いといえる。外国につながる子どもたちが日本の教育を受け、成長して日本社会の構成員になっていく上で課題解決する意義は大きい。

３．企業との協働による奨学金創設

教育課題に地域企業の協力を得た。

	学習支援活動の継続のために、協賛企業の物品販売を行って、製造業以外の企業にも愛伝舎の活動に関心を寄せていただく関係ができた。 ２０１２年の人口統計から、人口減少に関する問題について多く報道されるようになった。今後、減少する労働人口を補う意味でも定住外国人の存在は重要度を増すと予想され、自社人材として考えてもらえる機会が生まれている。 学習支援活動への共感が奨学金の創設につながり、企業のCSR活動への糸口となった。 ●課題 **１．教育現場との連携** これまで、学習塾が学校（特に義務教育において）連携する例はあまり見られなかったのではないか。愛伝舎も、かねてから市教育委員会や小中学校との協力関係があったが、一年半の事業期間内に連携を進めることができなかった。 一方で、世の中の流れに変化の兆しもある。民間人校長を導入した東京都杉並区の和田中学校の「夜スペ」「土曜寺子屋」は成績上位層、下位層への学習支援を行っており、保護者有志が作った和田中学校地域本部が運営に参加している。この事業の実施にあたって、東京都教育委員会は①機会均等、②特定の進学塾との連携の是非、③公務員の兼務・兼職を認めない原則からの逸脱、という疑義に対して現在容認している。 平成２５年度受託の県事業「キャリアガイド出前セミナー」開催を地域のＳ中学校に依頼したところ、快諾を得た。この際、学校の生徒が５名通塾していることが話題になり、学校外での彼らの成長を知ることができると学校側に喜んでいただいた。今後、子どもたちの成長を効果的に支援する連携を進めて行きたい。 今後、Ｓ中学校との連携で信頼関係を深めていき、この連携をベースにして活動を他校へも広げていきたい。外国につながる児童生徒に向けてのキャリアガイドセミナーの実施が連携に弾みをつける可能性は高い。 **２．人的課題** 生徒人数の変動で教育の質に差が出てしまう。 家庭学習の習慣がない家庭環境で育ち、生育歴も違う子どもたちは、同学年であっても学力の差が大きい。特に教室に入って学習のリズムに慣れるまでは、個別学習の対応をする必要がある。 平成２５年度の運営を見据えて支援者の人数に余裕を持たせずに対応してきた。このため、新しく生徒を迎えるときには支援者と生徒の人数バランスが崩れてしまい、支援者の支援リズムの再編にも時間がかかった。 また、支援が放課後～夜にかけての実施のため、家庭の主婦である支援者の負担が大きい。支援者の確保のためには支援者の家庭の理解を得ることが必要である。この点がボランティアや職業としての塾講師との違いで、全体の運営をみながら細部への配慮が必要となる。

平成25年度以降の見通し	●運営の見通し ａ）支援者　　５名 　　学習ボランティア 学生ボランティアを導入していく方向で、現在、鈴鹿国際大学教授と調整中。教員志望の若い世代が教育現場経験者から継続的に教育理念やスキルを学ぶ場になると同時に、子どもたちにとってはロールモデルとなる先輩との触れ合いでもある。教職課程を履修する学生のなかには外国につながる子どもたちもおり、先輩後輩として悩みを共有し、相談しあう関係が期待され、自己啓発の場としての機能も果たすと予想される。 県「キャリアガイド出前セミナー」事業と連携しながら運営をしていきたい。 ●財源となる資金の見通し ａ）月謝の改定 　　小学生　　１０，０００円 　　中学生以上　　１２，０００円 ｂ）寄付金 　　一口　　３，０００円 ｃ）ジャストギビングのチャレンジ募金など 現在の生徒数で、支援者賃金分を賄える状態。厳しい見通しである。 助成などに応募しつつ、事業を応援してくれる人をふやしていきたい。

（注）　当該支援額により取得し、又は効用の増加した価格が50万円以上の機械及び器具等がある場合、別葉にて、機械等の名称、価格、管理者及び耐用年数等を明記すること。

２　成果の達成状況等

<table>
<tr><td>平成 24 年度に達成しようとする成果</td><td colspan="3">（1）調べ学習ができるようにする
（2）自立的学習習慣、生活規律および学習規律を身につけさせる
（3）喜びや悲しみ、苦しみなどを共有できる師弟関係になる
（4）保護者が悩みや心配事を相談しやすい組織となる</td></tr>
<tr><td rowspan="6">具体的な指標の達成状況等</td><td>項　目</td><td>当初目標設定</td><td>平成 25 年 3 月末の達成状況</td></tr>
<tr><td>①小学生</td><td>目標値（70％以上）／　現状（50％）</td><td>60％～80％</td></tr>
<tr><td>②中学生</td><td>目標値（50％以上）／　現状（10％）</td><td>50％～80％</td></tr>
<tr><td>③高校生</td><td>目標値（日本語検定 3 級取得）／　現状（　―　）</td><td>―</td></tr>
<tr><td>④ブラジル人学校</td><td>目標値（80％以上）／　現状（60％）</td><td>―</td></tr>
<tr><td colspan="3">成果指標の達成状況</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="3">（1）　限られた時間でたくさんのことばの意味を辞書で調べ、それを書き写す作業は難しい。ことばノートを作って意味調べの楽しさを伝えるようにした。ノートを交換日記のように使い、子どもにも書き込ませてノート作りに参加させた。
　わからない問題は似た問題を教科書から見つけ出すように支援し、一度は自分で考える習慣づくりをめざした。

（2）　遅刻をしない、欠席の連絡をする、教室に入ったら学習準備をする、先生がいなくてもできることを始める、など。マナーについてはおおむね出来ているが、学習に関してはまだまだ依存心が高く、自分から行動に移しにくい子が多い。

（3）　信頼関係が深くなり、子どもたちが友達関係の出来事で心を揺らしていることをそっと打ち明けたり、学校外での活動の報告をしてくれる。支援者を自分達のことを親身に考えてくれる存在と実感して、子どもたちの自己肯定感が上がっている。

（4）　友人にも話しにくい子どもに関する悩みを保護者が聞かせてくれた。カウンセリング効果があった。特別支援に関する経緯で学校側と気持ちの行き違いがあったケースがあり、保護者に寄り添う立場の必要性を感じる。

　全体的には集団支援の中止や遅刻欠席の多い子、生徒の入れ替わり、など成果を達成するための条件が一定にならないため、数値では答えにくい。傾向としては、生活規範のしっかりした家庭や、保護者自身が日本語検定に取り組むなど、学習している姿を子どもに見せている家庭のほうが、子どもに成果がでやすい。子ども自身では、日本語の理解度によって伸びに差がでている。</td></tr>
</table>

	◎教科別の達成状況 　算数や数学に関しては、ことばを介さない計算や図形の角度を求める問題などの正答率が高い。図形の証明や文章問題など、日本語の力や論理的な思考が求められる問題についてはこれまで白紙回答していたものを、途中まででも書くということを徹底させた。途中加点をもらえる知恵を外国人の保護者は知らず、子どもに伝えることができない。日本人なら知る機会が多いことについて、それを情報として与えていくことも子どもにとって成果に結び付いていった。 ■評価の観点「意欲・関心」：Ａ（全員） ■　同　　「知識・理解」：Ｃ→Ｂ ■学年評価の伸び：「２⇒３」１名 　英語は、中３の生徒が英語科を受験することから、教室全体の学習ムードが高まった。母語に近い言語のため、皆「聞く」能力は高い。「話す」を取り入れながら、「読む」「書く」と学習がすべての領域にわたるよう支援者が支援を工夫し、成績アップにつながっていった。 ■評価の観点「意欲・関心」：Ｃ→Ａ、Ｂ→Ａ ■　同　　「理解の能力」：Ｃ→Ｂ ■　同　　「表現の能力」：Ｃ→Ｂ ■英語の学年成績：「２⇒４」「２⇒３」各１名 　国語に関しては、語彙を確実に理解することに重点を置いた。国語の教科書に限らず、音読させ一文ずつ語彙の意味、指示語が指すものなどを確かめていく。ことわざや慣用句などの正誤を考える。このような学習をしながら、「書く」ことへの準備を進めている。 　あれこれと書く材料を支援者と話し合うことで、思いが深まったり、出来事に対してよりよい行動を考える、など子どもたちは教室で濃密に考える時間を過ごしている。まだまだ成績に反映されるような成果は得られていないが、作文を書けるようになるという目標に向かって子どもたちは学習を続けている。
	達成に向けて行った工夫　または　未達成の原因及び講じた改善策
	漢字ドリルの漢字をほとんど書ける子どもでさえ、語彙理解ができていない。音読も上手で、日本語が解っていないことを見逃されてきている子どももいる。このような子は漢字テストでは点数がとれるけれども、単元テストでは得点が低い。そこで、漢字や計算に偏りがちな学校の宿題を機械的に書きこむのではなく、意味を考え、調べるよう支援している。 　また、ことばノートを作り、交換日記のように学校でわからなかった語彙を書きこませて学習するようにした。この際、ことばの持つイメージを絵や写真で伝えるように工夫し、関連することばや知っておきたい関連事項をいっしょに教えて、理解が進んだ。ノートがそのまま、子どもの辞典となっていく。視覚聴覚への刺激やロールプレイによる学習などは外国につながる子どもたちのみならず日本人の子どもたちへも有効な支援となるだろう。 　保護者へのアプローチにおいて様々な方法を使った。保護者が離婚していても両親が協

	力し合って子育てをしている家庭もあり、通信は紙で渡すだけでなく、データをメール添付して双方に送るなどして確実に保護者に見てもらう工夫もした。多様な方法をとおして保護者と運営側の交流を図っている。また、愛伝舎が行う交流行事にも声をかけて気安い関係を築いている。 　ことばの壁は精神面で不安やストレスがたまるので、通訳の存在は重要である。ブラジル人職員には連絡が寄せられるだけでなく、世間話や相談も寄せられる。ここからいろいろなことがわかることも多い。相談ごとを通訳に話すことは、自分の気持ちや状況を解っている同胞から代弁してもらうことであり、安心して相談できるという利点もある。 　キャリアガイドセミナー事業を意識して運営したことによって、学習支援を教科支援とキャリア形成支援というふたつの視点で構築することができた。ここからセミナー引率や教育相談という内容の広がりが生まれた。
現状の 自己評価	評価ランク
	☑Ｓ：特に優れた成果が得られた　　□Ａ：優れた成果が得られた □Ｂ：一定の成果が得られた　　□Ｃ：限定的であるが成果が得られた　□Ｄ：成果が得られなかった （該当する評価にチェックを付けてください）